

『北海道開拓功勞者関係資料集録』のこと

松川 莞爾

- | | |
|-----------|-----------|
| 1 はじめに | 3 集録原稿の作成 |
| 2 集録の編集計画 | 4 おわりに |

1 はじめに

この集録は、ページを開くとひと目で北海道開拓功勞者ひとりひとりのことがらがわかるようになっている。たとえば、どのような面で功績があったかの簡単な事績は「プロフィール」の欄で、いつどこで生まれてどのように育ち社会に出てどのようなことがあり、いつどこで死去したかは「略年譜」欄で、この人のことを知るための文献や著書類にはどのようなものがあるかは「参考文献」欄で、そして遺族や参考となるべき事項は「その他」欄でわかるというように、必要なことがらはそれぞれの欄をみるとおおよそのことが判明するように配慮して作成したものである。

これら功勞者の数は総数 235 人。その出身地は、『北海道開拓功勞者関係資料集録』下巻の 6 ページに「都道府県別功勞者出生一覧」を収載したが、

東北地方は地縁的な関係から若干多いほか、各県に広くちらばっている。該当しないのは、群馬・鳥取・熊本・宮崎の 4 県にすぎない。県別の人数をみると、東京都の 21 人がいちばん多く、ついで本道 19 人、新潟県 16 人、鹿児島県 10 人、宮城県 8 人、青森・秋田・徳島・高知各県 7 人となっている。このように出身地が全国的にわたっているのが本道開拓功勞者の特色のひとつといえるかもしれない。

さて、この集録の内容を詳しく述べる前に、集録作成の基礎になった北海道開拓功勞者伝記の編集経緯について若干説明しておかなければならない。この経過も、集録下巻の巻末に詳細記述しているが簡単にふれてみよう。

そもそも、開拓功勞者伝記をつくる動機となったのは、昭和 43 年の北海道百年を盛大に祝おうとしたことがきっかけである。そして、この記念事業を、ただ単なる祭典にとどめず若い世

代に開拓時代の先人の労苦を銘記させるとともに、後代に歴史・文化の遺産を引き継ぎ、本道の発展を顕示して実質的な行事を実施するという事になった。このため、道では開道百年をめぐりて道史および伝記の編集刊行事業に着手することになったわけである。

当初、道は開拓功労者を100人にしようという考えかたをもち、昭和36年8月、北海道史編集審議会に開拓功労者100人の選考について意見を求めた。いっぽう、候補者となるべき人の推せんを各支庁長および市町村長にも依頼、審議会委員からも推せんを求めたところ、その数は699人にも達した。

翌37年6月、審議会から日本人208人、外国人27人、計235人の答申があった。この答申を受けた道は、伝記編集刊行計画をたて、略歴・記録・写真・遺族などの調査を行ない、資料が割合に多い108人（日本人100人と外国人8人）を『開拓につくした人びと』（全8巻・付録1冊）に、残り127人は略伝としての『開拓の群像』（全3巻）に収録することになった。これら伝記原稿の大部分は、外部に執筆を依頼、文書課内に編集会議を組織、討議をかさねリライト・補訂して5,500部を印刷し、道内の市町村、小中高校、大学図書館、公共図書館、歴史研究者、道外の関係機関、功労者遺族などに配布、一般的な評価としては、たいへんおもしろく読める、全体的にうまくまとめられているというような意見が多

かった。しかし、少数ながら功労者に対しての根本的な疑問や、叙述方法あるいは編集体制などに対する指摘とか、235人だけが功労者ではない、無名の人にも目をむけるべきだ、記述に誤りがある、みかたが片寄っている等々の批判もあった。

ともかく、開拓功労者伝記全シリーズは、庁内外の協力、激励そしてさまざまな批評を受けながら44年に完結することができた。そして、これら伝記刊行のために数多くの資料も収集されたのである。

2 集録の編集計画

開拓功労者伝記はこのようにして、7年の歳月をついやし刊行された。出版後、遺族が判明したり資料を紹介してくれる人もあって、新事実も補充された。しかしながら、伝記の性格上、収集されたばう大な資料の一部が利用されただけにとどまり、他は利用の機会も少なくうずもれてしまうことになるので、この機会に総括目録的なものにまとめる必要があるのではないかという声が編集担当者からもあり、また、研究者などの一部からも資料を公開してほしいという意向もあって、目録刊行に対する期待が高まってきたものである。

かくして、伝記編集に利用した資料を基本に未使用の資料やその後入手した資料・情報なども含めて、開拓功労者関係資料の総集編ともいうべき目録の編集にとりかかることになったので

ある。内容としては、伝記の要約版でもあり、資料索引の役割もかね、伝記内容の訂正・補正をして後世における研究に役立つものにしようということになり、44年5月に刊行要綱づくりに着手した。

方針としては、功労者の事績と生涯を一連の歴史的事実を資料によって正しくとらえ、平易な編集に意を用い、B5判横組み、活版印刷700ページ程度、掲載内容はおおむね次のようなものにしようということになった。

- ① 功労者名 できるだけ別名をいれ、本名には呼びかなをつける。外国人はスペルをいれるようにシフルネームとする。
- ② 略年譜 誕生から死亡までの主要事項とする。明確でない事項で数説あるものはできるだけ紹介する。必要と考えられるものには引用文献を明示する。
- ③ 参考文献 直接関係あるものを原則とするが、関連があり必要と思われるものも加える。稀少文献は収蔵者を付記する。文献の範囲は、功労者自身の文書、日誌などの記録、著作、功労者についての伝記、論文、記事、刊行物のほか必要に応じ解説を付す。
- ④ 遺品・遺構など 名称、所在、いわれなどを明らかにする。
- ⑤ 顕彰碑・記念碑など 所在、碑文などを明らかにする。
- ⑥ 肖像・写真 来歴、所蔵者を明らかにする。

⑦ 遺族・関係者など 遺族・資料所蔵者・事績等聴取可能者の氏名、年齢、住所、功労者との関係、そのほか必要事項など。

⑧ 研究の動向 研究者についての動き、評価など。

⑨ その他 伝記執筆者の紹介、出身都府県の状況。その他必要と思われる事項（例えば、伝記の修正事項等）。

これには、行政資料室（文書課から独立、現在の行政資料課）のスタッフ8人が主体となって編集員会議を構成して執筆にあたり、1年で刊行するのは無理なので2年で完成させる。そして1,000部を印刷、関係機関、遺族およびその関係者、郷土史グループ等に配布するというものであった。

このような基本方針にもとづき、45年1月に1回目の編集員会議を開催、その後、事情もあって執筆作業にはいるまで手間どったが、10月までに会議を重ねること数回、上巻に118人、下巻に117人、外国人は下巻の日本人のあとに配し、巻末に功労者選定経過と伝記刊行経過をまとめることにした。

また、登載項目は、氏名・プロフィール（200字程度で紹介）、略年譜、参考文献、その他参考事項の5項目とすることに決定。当初の方針からはずすことになったものは、肖像・写真、研究の動向、伝記執筆者紹介、出身都府県の状況、伝記の修正事項等である。なお、本文は8ポ、1ページ2列横組み、功労者1人分は見開きにして2ペ

ージという原則で執筆にとりかかることになった。

3 集録原稿の作成

上巻の場合、原稿執筆から印刷完了まで5か月余しかなく、時間的には多少無理であったが、1月中旬までに原稿を書きあげ、編集員会議で内容の考証・補訂を2月中旬までに済ませ、3月末に印刷完了というスケジュールを組んだ。このような無理なスケジュールは印刷の校正段階にまで影響をきたした。内容の不備な点や不審と思われることからは、初校時はもちろん再校時でも情報をとらえては、道外にまで事実確認や考証のために電話をかけて追加補正し、印刷会社に多大の迷惑をかけてしまった。この点、下巻は、前車の轍をふまぬよう1年間を有効に活用しながら執筆をすることができた。

しかしながら、この集録は、さきに刊行した伝記の改訂補正ということも含まれているので、所蔵資料の中から新事実や間違いを発見したり、新しい資料を見つけ出して功労者の事歴を明確にしなければならないという苦労があった。

留意したおもな点をあげると、

- ① 功労者名 漢字の間違いはないか。読みかたにどのようなものがあったか。別名(通称・あざな・幼名・旧姓・旧名・改名・号・屋号等)はあったか。
- ② プロフィール 事績で大きく評価

すべき点は何か。表現方法はよいか。サブタイトルは事績から推測して適当か。

- ③ 略年譜 出生から死亡まで事績もれはないか。本道関係の事歴に重点がおかれているか。功労者の事績からみて時代背景となるべきことを加える必要はないか。数説あるものの扱いをどう判断するか。

- ④ 参考文献 自身の著書はあるか。論文はどのようなものがあり、どの印刷物に掲載されているか。関係事項の一部でも掲載されている刊行物はあるか。文献が多すぎて全体が2ページをオーバーする場合、表現を略して掲載する方法はないか。省略するとした場合、略年譜その他参考事項欄でどの部分が省略できるか(文献は、基本資料なので、できるだけカットしない方針だった)。文献が少なすぎる場合、事績や活躍した地方などから推測してどのような文献があると推測できるか。

- ⑤ その他参考事項 遺族が判明しない場合、何か手がかりになるものはないか。研究者や事績に詳しい人はだれか。遺品、墓、碑などの所在・管理者など

である。できあがった原稿は複写して各編集員に配布、下見のあと編集会議にかけて事実考証を進めた。考証の所要時間は、功労者1人あたりおおよそ1時間程度をかけ、とくに略年譜と参考文献に重点をおいたが、中には3～4時間かかったものもあった。

ことに問題が多かったのは、プロフィールの表現と略年譜に取りあげた事項で、プロフィールは会議で手を加えたため、文章のスタイルがある程度画一的なものになってしまい、執筆者の個性をあらわせないうらみがあったけれども、1冊のものとして出す以上しかたのないことであった。また、時間の関係上、一部の原稿は編集員以外に依頼したが、依頼時の説明不足や認識の違いなどもあってか、伝記を鵜呑みにして執筆したものがあつたり、略年譜には孫引きなどによる内容の不正確なものが多く、文献では当然記載されてなければならぬものが落ちていたり、記載方法が既定の様式に合わなかったり、全体的に大幅な修正をを加えなければならぬものがあつたりして考証に予想外の時間がかかった。

ところで、この集録を見開きにするという方針は、みやすさのほか1ページにしかない場合でも、利用者が空白部分にメモが出来るようにということも配慮してのことであったが、上巻の場合、不なれと時間的制約もあって、印刷した場合、1ページにしかないものが4分の1にあたる30人ほどもできることになった。編集員会議で表現方法を変えてみたり、関連文献をいれるというテクニックを使い2ページに増幅することに努めたが、それでも20人程度はいかんともしがたく、体裁上のことや予算的制約もあって、当初の見開きという原則を変更して追込みにしてしまった。

その点、下巻ではある程度時間的に余裕があつて117人のうち1ページにしかならなかったのは、日本人1人外国人4人の5人であった。日本人は親子2代が功労者となり、初代のほうである程度表現したため、外国人は資料不足が原因であった。

なお、下巻編集の時点で、功労者都道府県別出生一覧表をみやすく載せるべきでないか、上巻に対し各方面から教示をうけたことや間違いなども含めて、300近いことがらが明らかになったので、それらを補遺として載せるべきだという意見が大勢を占めた。編集員会議で検討の結果、都道府県別出生一覧は全国を略図化して功労者名を出身県別にいれる。補遺は、印刷上のミスや軽易なものを除き、約160の事項について巻末に収載するということになり、集録上巻を充実することができた。

4 おわりに

伝記および集録刊行のために集められたこれらの功労者関係資料は、本道の歴史の1ページを物語る貴重な資料として、いま、行政資料課の書庫に保存されてつぎの出番を待っている。

功労者全員が過去の人であったため資料を収集するのはなみ大抵の苦労ではなかった。ことに、明治以前に活躍された人びとについては、いっそうその苦労が多かった。

ところで、功労者の事績がはなばなしかったのに、集録編集の調査時点で

140

に新とへいなぞう
渡戸稲造

旧姓一太田，幼名一稲之助，名乗り一常瑠

に

札幌遠友夜学校の理想

札幌農学校教頭W. S. クラークの影響を強く受けた1, 2期生のなかで，国際人として，国際聯盟事務次長また日米間の友好のため働いたのが新渡戸稲造である。かれはまた，明治期のすぐれた農政学者・教育者として活躍したが，それは公教育の場にかぎられなかった。とくに，社会的に恵まれない人びとへの愛情が，女子教育・通俗教育・社会事業にかかわらせることとなった。

その最初の実践は，貧困のため正規の教育を受けられなかった青少年のために設けた遠友夜学校であったが，これはかれの人格を慕う農学校学生若いの熱情によって引き継がれていった。(文化の黎明 下 P. 99~114)

略年譜

- 1862/文久 2. 8. 3 陸奥国盛岡郷匠小路(盛岡市)に新渡戸十次郎・せきの3男として出生
- 1871/明治 4. 一 上京。おじ太田時敏の養子
- 1877/〳〵 10. 7. 27 札幌農学校官費生徒申付
- 1878/〳〵 11. 6. 2 塾教師ハリスから受洗
- 1881/〳〵 14. 7. 9 農学校卒業。開拓使勤務
- 1883/〳〵 16. 9. 20 東京大学入学。翌年，渡米，留学。滞米中，農学校助教，ドイツ留学
- 1889/〳〵 22. 4. 一 新渡戸家を相続，復姓
- 1891/〳〵 24. 1. 1 メリー・エルクソンと結婚。帰国。札幌農学校教授。道庁技師兼任
- 〳〵 24. 8. 21 新設の北嶋学校教頭
- 1894/〳〵 27. 1. 一 札幌遠友夜学校を創立
- 1897/〳〵 30. 10. 一 病氣療養，札幌をはなれる。翌年，渡米。『Bushido』を著述
- 1899/〳〵 32. 3. 27 農学博士
- 1901/〳〵 34. 2. 20 台湾総督府技師。35年6月18日，臨時台湾糖務局長
- 1903/〳〵 36. 10. 16 京都帝大法科大学教授兼任
- 1906/〳〵 39. 9. 19 法学博士。28日，一高校長兼東京帝大農科大学教授。41年，法科大学教授
- 1911/〳〵 44. 8. 8 日米交換教授として渡米
- 1916/大正 5. 一 遠友夜学校，私立学校認可
- 1918/〳〵 7. 一 東京女子大学長
- 1920/〳〵 9. 5. 19 国際聯盟書記局社会部長就任の許可。大正14年，事務次長就任の許可

- 1923/大正12. 8. 1 遠友夜学校，財団法人許可
- 1929/昭和 4. 一 太平洋問題調査会理事長
- 1932/〳〵 7. 4. 14 満州事変による対日国際世論悪化を憂い渡米。各地で講演
- 1933/〳〵 8. 10. 16 カナダ・ビクトリアで客死。72才。遠友夜学校長は夫人が継ぐ

参考文献
(全集)

- ・新渡戸稲造全集編集委員会『新渡戸稲造全集(全16巻)』教文館 昭和44~45 ①矢内原忠雄(訳)「武士道」「東西相触れて」宮部金吾「小伝」『略年譜』②「農業本論，増訂」「農業発達史」「Über den Japanischen Grundbesitz」③「米国建国史要」「建國美談」「ウィリアム・ベン伝」④矢内原忠雄(編)「植民政策講義及論文集」「諸論文・時評など(20編)」「故農学士藤田九三郎君小伝」「新渡戸博士諸論文・時評等の目録」(掲載雑誌：『警世』『中央公論』『国家学会雑誌』『雄弁』『拓殖新報』『学生』(高山房)『婦人公論』『現代』『改造』『キング』『人間味』(人間味社)『実業之日本』『女学雑誌』)⑤『随想録』『随感録』『偉人群像』⑥『帰雁の聲』『内親外望』『西洋の事情と思想』⑦『修養』『自警』『余は何故実業之日本社の編集顧問となりたるか』⑧『世渡りの道』『一日一言』⑨『ファウスト物語』『衣服哲学講義』⑩『人生雑感』『人生読本』⑪『婦人に勧めて』『一人の女』読書と人生』⑫『Bushido, The Soul of Japan』『Thoughts and Essays』(和訳：『随想録』，桜井陽村『折にふれ』丁未出版社 大正3) ⑬『The

Japanese Nation; Its Land, Its People, and Its Life] [The Intercourse between United States and Japan] ④ [Japan; Some Phases of Her Problems and Development] [Japanese Traits and Foreign Influences] ⑤ [Lectures on Japan] [What the League of Nations Has Done, and Is Doing] (和訳: 三枝茂智『国際聯盟の活動』一匡印刷所 大正10) [The Use and Study of Foreign Languages in Japan, A Study in Cultural Internationalism] [Reminiscences of Childhood] [Westen Influence in Modern Japan] [Two Exotic Currents in Japanese Civilization] と同じ) [An Unfinished Translation of Lao-Tzu and English Abstract of the Kojiki] ⑥ [Editorial Jottings]

(全集収録以外の著書・論文)

- ・『The Imperial Agricultural College of Sapporo, Japan』札幌農学校 1893
- ・『授業ノ精神』(北嶋学校旧友会『北嶋学校紀事』同会 明治38)
- ・『奮闘力の養成』豊文館 大正1 (『修養』『世渡りの道』などから転載、著者不承諾のまま出版)
- ・『泰西思想の影響』(大隈重信ほか(編)『開国五十年史(全2冊)』開国五十年史発行所 明治40~41)
- ・『American-Japanese Intercourse Prior to the Advent of Perry』(『Amer. Hist. Ass. Annual Report for 1911』)
- ・『家族平和会に於ける新渡戸稲造博士講演集』昭和4
- ・『A Japanese View of Quakerism』 Friends Service Council 1929
- ・(編)『太平洋問題』太平洋問題調査会 昭和5
- ・『Japanese Public Economy and Finance』1931
- ・(編)『中等大日本修身1~5』大日本図書刊昭和6
- ・(編)『実業大日本修身1~5』実業の日本社昭和6
- ・『Development of International Cooperation』1932
- ・矢内原忠雄(編)『新渡戸稲造文集』故新渡戸博士記念事業実行委員会 昭和11(『著述目録』(解題付)和文文献再刊:『新渡戸博士読本』実業の日本社 昭和12
- ・『The Japan Student, A Noteworthy Factor in the Life of Japan』(『The New East 1-3』)
- ・上記および全集④『新渡戸博士諸論文・時評等の目録』に収録以外の論文掲載雑誌:『女学雑誌203』(明治23) 勸農協会『北海之殖産 11, 12, 14, 15,

30, 49, 50, 62, 77』(明治24~29) 札幌農学校学芸会(のち改称)『蕙林 1, 11~16, 18, 20』(『学芸会雑誌』と改題), 22, 23, 24, 55(『文武会会報』と改題)。(明治25~41)『統計集誌』(明治28. 2~3, 29. 5)『日本の宗教』(明治29. 4)『The Far East 1-1』(『国民の友』296) (明治29. 5)『新女界』(大正7. 2)『講演 214』(昭和8)『講演の友』(昭和8)『交詢月報』9巻(昭和8)ほか

(伝記など関係文献)

- ・札幌遠友夜学校『遠友』同校(『新渡戸校長先生追悼号』昭和8)
- ・『実業の日本 新渡戸博士追悼号 昭和8. 11』
- ・『新渡戸稲造伝 1~19』(『岩手日報』昭和8. 12. 21~9.)
- † 石井満『新渡戸稲造伝』関谷書店 昭和9
- ・前田多門, 高木八尺(共編)『新渡戸博士追憶集』昭和11
- ・矢内原忠雄『内村鑑三と新渡戸稲造』日産書房 昭和23
- ・高倉新一郎『札幌農学校教授新渡戸稲造 1, 2』(『北大季刊』6, 7) 昭和29, 30)
- † 高倉新一郎『札幌遠友夜学校』札幌遠友夜学校 昭和29
- ・砂川万里『内村鑑三・新渡戸稲造』東海大学出版会 昭和40
- ・山本泰次郎『内村鑑三 信仰・生涯・友情』東海大学出版会 昭和41
- ・武田清子『土着と背教』新教出版社 昭和42
- † 東京女子大学新渡戸稲造研究会『新渡戸稲造研究』春秋社 1969 (巻末: 書簡・年譜など)
- ・松隈俊子『新渡戸稲造』みすず書房 昭和44
- † 北海道大学附属図書館閲覧課『新渡戸文庫目録』同課 昭和45 (略年譜・著書目録を付す)
- † 東京大学庶務部人事課 履歴書

その他

- ・新渡戸稲造顕彰碑 盛岡市岩手公園
- ・遺族 新渡戸こと子 東京都新宿区東大久保 2-303 新宿第2コーポ 416
- ・関係機関 (旧蔵書・文書など関係文献所蔵) 東京女子大学 東京都杉並区善福寺 2-6-1 東京大学経済学部 東京都文京区本郷 7-3-1 北海道大学附属図書館 札幌市北8条西5丁目市立新渡戸記念館 十和田市三本木太素塚 札幌市第1勤労青少年ホーム 遠友夜学校記念室 札幌市南4条東4丁目 参照: 30内村鑑三

は、遺族が没落して不遇な生活をしていたり、遺族と非常に近い親戚をようやくつきとめその遺族の所在を照会したが、交際がないからといって住所も教えてもらえず、たぐっていった糸がそこでプツリ切れてしまったり、ようやく遺族を探しあてたと思ったら同姓の他人であったり、いまさらながら当時のことがまざまざと思い出される。

ともあれ、多くの労力と時間をかけた『北海道開拓功労者関係資料集録』は47年3月に完結し、伝記事業はこれをもって完了した。刊行後の評判は手前ミノながら悪くはない。しかし、担当者から見ると上巻には及第点がつけられない。それは、功労者1人に対する執筆期間が、下巻では2週間以上もあったのに、上巻の場合は1週間程度しかなく、じっくり綿密に調査ができなかったために上巻の内容が充実していないからで、いまさらながら後悔をしている。

しかし、集録をこのような面で利用しているとか、役立ったという話を耳にすると編集した一員として満更悪い気もしない。筆者にとって、この集録

編集業務は行政資料課に主査として勤務し、責任をもたされた最初の仕事で、それまでは歴史関係業務にたずさわったこともなく、また、これらのことに興味をもったこともなかった。しかし、集録業務を2年間担当したことによって、曲りなりにも歴史資料にいくらか興味もてるようになり、資料の見かたも少しはわかるようになったことは資料を取扱う者としていささかプラスになっていることは否めない。

このたび、国会図書館からこの集録の編集についての苦心や各方面からの批評など何か書いてほしいという依頼があり、読者のかたがたに披瀝できるほどのものとは思っていないが、舌足らずな駄文を呈し、おおかたのご批判をお願いしたい。

最後に、資料収集の面では、各種図書館をはじめ、資料所蔵者、郷土史研究者の協力をうることができ、とくに、北海道大学図書館北方資料室、函館市立図書館、道立図書館北方資料室にはたいへんお世話になったことを付記しておく。

(まつかわ・かんじ 北海道総務部
行政資料課収集整理係長)